

『俺は脚が速かった』 作…岩本憲嗣

■登場人物

坂上一彦 (28) 会社員
田村克己 (24) 坂上の後輩
小野百恵 (28) 坂上の同級生
安倍信子 (27) 坂上の同僚
坂上智子 (55) 坂上の母
額田原公子 (28) 坂上の同級生

○坂上家・一彦の部屋

坂上一彦 (28) と坂上智子 (55) が荷物をダンボール箱にしまっている。

坂上「あのさ、なんでもかんでも詰めるのやめてよ。荷物が増えるでしょ。って、何しまってるんだよ」

智子の前のダンボールには坂上の卒業アルバムなどが詰まっている。

智子「たまには眺めて昔を懐かしみなさいよ癒されるわよ」

坂上「こんなもの持ってかないよ」

坂上、ダンボールを取り上げると、中に紅白帽が入っていることに気づく。

坂上「ん？これって」

坂上、ダンボールから紅白帽を取出す。

智子「あら懐かしい、一彦が初めて女の子から貰ったプレゼントじゃない」

坂上「え？」

坂上、紅白帽を裏返してみる。帽子の赤い生地の部分にマジックでヌカタワラキミ
コと書いてある。

○平安宝石・カスタマーセンター

坂上がデスクに座り紅白帽を眺めてる。

その隣に田村克己(24)が立っている。

田村「へえ、転校する前に貰ったんすか？でもなんでそんなもの職場にまで？」

坂上「聞いたことないか？ヌカタワラキミコって名前？」

田村「お客さんですか？いたようないなかったような。先輩の方が詳しいでしょ？」

安倍信子(27)が大量の封筒を抱えてやってくる。

信子「ポーツとしてないで坂上さんも手伝って下さい」

田村「あーあ、自分が一番お上になれるからって張り切っちゃって」

信子「田村君は無駄口叩いてる暇あったら…」

田村「わかっております。じゃ行ってきます」

坂上「え？どこに？」

田村「先輩の送別会の予約ですよ。じゃ！」

田村、慌ててその場を去る。

坂上「どうしようもないな。ねえ、それなに？」

信子「督促状。支払いが滞ってるお客様に一斉に送るんですよ」

坂上「そんなの信販会社さんに任せたら？」

信子「坂上さんが転勤したらこの未回収分は全部私の責任になりかねないですよ？坂上さん少しは責任感じて下さい」

坂上「はあ」

信子「封するだけですから、お願いします」

坂上「あれ？安倍さんは？」

安倍「課長と打合せです。カスタマーセンターの改善策について」

安倍、書類束を片手に去る。

坂上「改善ね。そんなに駄目でしたか」

坂上、一枚づつ封筒を糊付けしていく。

手にした封筒の宛所にふと目が行く。そこには額田原公子と書いてある。

坂上「いた。……そうか、やっぱりウチの顧客だったんだ」

坂上、督促状を取り出し眺める。

坂上「額田原……同姓同名……ないよな」

坂上、デスクから紅白帽を持つてくるとじっとみつめた後に一緒に封筒に入れて封をする。

○ 額田原のマンション・居間

小野百恵(28) がパンパンに膨れた平安宝石の封筒を持っている。
少し躊躇した後に封を開けると中から紅白帽が出てくる。

百恵「なにこれ？」

○ 平安宝石・カスタマーセンター

電話応対をしている坂上。

坂上、電話を切ると田村がやってくる。

田村「先輩、お客さんつすよ。女の人」

坂上「え？知らないよ」

安倍「お客様じゃないんですか、ほら、督促書面は全部坂上さん名義でしたから」

○ 同・応接室

百恵が座っている。

坂上がやってくる。

坂上「はじめまして。本日はどのような…」

百恵、鞆から紅白帽を取り出す。

坂上「あ、それって……あ、あの、そのごめんなさい突然そんなの送っちゃって」

百恵「坂上君？6の1の？」

坂上「は、はい。ああ何ていうかその…」

百恵「やっぱり。坂上君勘違いしてるよ。公子じゃないって」

坂上「え？」

○ファミリーレストラン・中（夜）

坂上と百恵が向かい合って座っている。

百恵「びっくりしたわよ。変な封筒が届いてるから開けてみたら坂上君の名前が書いてあるんだもの」

坂上「こっちだって驚くよ」

百恵「その帽子ってあれでしょ？公子が転校する前の日に運動会で」

坂上「ああ。リレーの選手だったのに帽子がなくて、で額田原さんが貸してくれた」

百恵「知らないでしょ？それ嘘だよ。本当は公子がわざと坂上君の帽子隠したの。自分の持ち物プレゼントする口実作りに」

坂上「なにそれ？なんで？」

百恵「坂上君のことが好きだったからに決まってるでしょ？女子の間で大人気だったんだよ。頼れる学級委員だし。でもあれだね。坂上君は変わらないね」

坂上「まさか、…全然変わったよ」

小野「そう？でも公子に比べたら全然だって」

坂上「そうだ、なんで額田原さんの手紙を小野さんが？」

小野「二人でルームシェアしてたの。大学が偶然一緒にそれ以来の付き合い」

坂上「そのさ、元氣？額田原さん」

小野「先月から行方不明。なんでかなと思ったらこれのせいなんだね」

百恵、鞆から何通もの公子宛の督促状を取り出す。

小野「もう小学校の頃の面影なんてないよ。真っ赤な髪して何の生き物か分からないような毛皮着込んでさ」

坂上「額田原さんが？…そうなんだ」

小野「こんなの届いたからさ、ひよっとして坂上君なら居所知ってるかなってね」

坂上「ごめん。分からない。…でも信販会社なら分かるかもしれないから調べてみる」

坂上、机の上の督促状をみつめる。

○ 平安宝石・カスタマーセンター（夜）

電話をかけている坂上。

坂上「はあ、そうですか。もし連絡つくようでしたらカスタマ……仙台支局の坂上宛てまでご連絡いただいてもいいですか？」

田村、坂上が話し終わるのを見計らって勝手に電話を切る。

田村「ほら、いつまで仕事してるんすか。主役が来ないと送別会にならないっしょ？さあ、今夜は壊れましょうね」

○ 公園のベンチ（夜）

坂上が酔いつぶれて寝込んでいる。
それを介抱している田村と信子。

田村「本当に壊れることないのに。そうだ。」

田村、坂上の鞆を漁り紅白帽を取り出し坂上にかぶせる。

信子「ぶつ、何やってるのよ」

田村「もう当分会えなくなりますから、先輩と遊ばないと。あ、口紅貸して下さい」
信子「塗るの？そうだ、いらぬのが確か」

信子、鞆から口紅を取り出し渡す。

田村、口紅で寝ている坂上の頬を塗る。

信子、堪えきれず大爆笑する。

その声で坂上が目覚めます。

坂上「あ、ごめん。潰れてた？」

田村「いい、いいんすよ。さ、じゃあ帰りましょう。タクシー拾って来て下さいよ」

○ 公園・入り口（夜）

タクシー待ちをする〇人

田村「早くこないっすかね」

信子「あ、来た」

乗せる。
タクシーがやってくるが〇人より手前で手を挙げていた毛皮のコート姿の女性のを

信子「ああ、何よあのケバイ女」

坂上「毛皮？」

女性を乗せたタクシーが〇人の目の前を通り過ぎる。
街頭に照らされて見えた女性の髪は赤。

坂上「額田原さん!？」

タクシーの中の女性が振り返るがタクシーはそのまま走り去る。
坂上、全力疾走でタクシーを追う。

信子「え?坂上さん!？」

信子が振り返ると坂上の姿は既に小さくなっている。

○踏み切り(夜)

タクシーが走ってくる。その後を坂上が走って追ってくる。

タクシーが踏み切りを渡り終えると警笛が鳴り遮断機が下りる。
立ち止まる坂上。

目の前を電車が通り過ぎる。その風で坂上の帽子が足元に落ちる。
遅れて安倍と田村がやってくる。

田村「一体どうしたんすか?急に」

坂上「ちよっと…」

安倍「坂上さんで意外に脚速いんですね。タクシーにびったりついてくなんて」

坂上「え?…ああそういえば俺昔から速かったんだ。そうなんだよ」

坂上、足元の紅白帽を拾い上げる。

【終】

※ご利用上の注意※

- ・本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) までメール報頂けますようお願い致します。
- ・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・仲間内で集まつての練習でのご利用。
- ・Skype などを通しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com (岩本)